『心に残る言葉』
Words to Remember

小野寺　健　著　河出書房新社

村田　修子

ひとは多かれ少なかれそれぞれの年齢や生活している環境などからさまざまなことを感じながら生きている。そしてその経験を自らのものに加えながら成長していく。だからこの〝感じる〟ということが大切なことなのである。そのために、幼児の世界でも目標の一つとして「感性」という項目が表に出てきたものと思う。過ぎたるは何とやら、で余り鋭どすぎたり、他の人のせいにするような感じ方はどうかと思うが、感じることが何につけても必要なことはいうまでもない。

聞いた言葉に、またひとのするのを見たり、文字で書かれたものに感じることの大切さを私と同じように思っているから書かれた、と思われるこの本を興味深く見た。

外国の人の言った言葉が解説してあるため、片面に英語で書かれ、その下に解釈がある。そして反対

側の頁に著者の見解・意見・感想などが格調高く書かれている。

Nothing had really taken place in them until it was told to their mother.

D.H.Lawrence

彼らにとっては、母親に話すまでは、何事も起きたことにならないのだった。

D・H・ロレンス

D・H・ロレンス（1885－1930）
イギリスの小説家・詩人。予言者的な現代文明批判で知られる。『息子と恋人』『チャタレー夫人の恋人』など。

「幼い子どもにとっての母親というのは、こういう存在なのではないか」

「その日にあったことを母親に話すことによって、あったことがはじめて現実になる——。家に帰っても、そういう母親がいなければ、子どもは満足を得ることはできない。そのとき子どもは何を考えるだろうか。そのむなしさに耐えられる想像力や精神力など、まだ持っているはずがない」

と今の日本の現状に当てはめて、母と子どもの関係、その状態の中で育った子どもたちが大人になったときのことを案じている。

母と子どもの関係については、「仕方なくそうしているとか、女性の自立、という反論があるかもしれないが、そういう人にとっても先のことは分かりっこないものである」、と結んでいる。

一つの例として幼児に関係あるものをとり上げてみたが、アメリカの詩人、ロングフェローの「誰の人生にも雨は降る、暗く悲しい日がある」、ドロシー・ワーズワース（詩人ウイリアム・ワーズワースの妹）の「おお、神は冬を何という美しいものにして下さったのだろう。木々を裸にし、その姿形を見せて下さって」等々、横文字は苦手の私だけれど、これらの文章にはどれもリズムがあって快い。

今、最も私が心ひかれている言葉がある。

〝青春とは人間の一生のうちの或る時期をいうのではなく、心の様相をいう。優れた創造力・逞しい意志・燃ゆる情熱・卑きょうなことをしりぞける勇猛心・安易を振りすてる冒険心を持っていること。だから年を重ねただけでは人は老いない。理想を失うときに初めて老いがくる。歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失うときに精神はしぼむ。〟

何の本に書かれていたのか忘れてしまったのは年のせいとはいえ残念なことで、逆に出所を教えて頂きたいと思うのだが、この言葉は味わうと力が湧いてくるために、私の「心に残る言葉」としてここにのせさせて頂いた。

もう一つ、これも図書紹介とはならないことは承知の上で、これからものされるだろうと思われる、まだ見ぬ本を紹介したい。

それは、未曾有の震度を記録した阪神大震災を直接経験なさった、藤本義一氏の体験談である。毎日報じられるそのときの話は、時がたっても聞くたびに涙が自然に流れてしまう。

藤本氏は、丁度テレビの他の番組に出演しておられたが、その冒頭に地震のときの経験を話された。

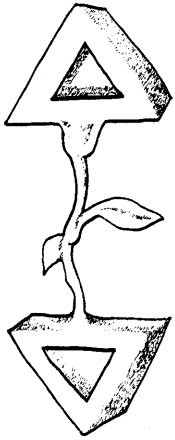
・そういうときは足元がしっかりしていなければ、腰がくずれてしまう。だから必ず底の厚い（登山靴のような）靴をはくことが必要である。散乱した危険物によって怪我をする。そうすれば何の活動もできなくなってしまうからである。

・揺れていた時間は多分何十秒という短い時間であったと思うが、とても長く感じられた。その間空中を色々なものがヒューンととんできた。暗くて初めは何がとんでいるのか分からなかったが、本がたくさん置いてあったへやなので次第に見えてくると、厚い本が空中をとんできた。あとで見ると薄い本はざらざらと下に落ちていた。

普段の常識とは全然かけ離れた事象が起こるのだ、ということを知った。

・一応落ち着いたので外に出た。外に出ると人はみな走っていた。そこへ犬の群れがやってきた。犬は整然と並び人間と反対の方向へ走って行った。人は危険な方向へ走り、犬は安全な方向へ進んで行ったそうである。動物の本能といおうか安全を感知する不思議なものを感じた、ということであった。

このような様々な実体験から感じられたことがまとめられて、私共の目に届くことを期待して、まだ見ぬ本を紹介する。

（洗足学園短期大学）

＊『心に残る言葉』の出所は解説によると、英字紙 Asahi Weekly に連載中の言葉のコラムより抽出したものです。